博士（文学）学位請求論文審査報告要旨
熊進「成都方言文法研究－文法化のアプローチ－」

本論文は中国語北方方言西南官話の四川とくに成都方言の文法化（grammaticalization）を考察したものである。文法化とは一般に名詞や動詞など具体的内容を表す内容語あるいは語彙項目が文法的機能を担う機能語あるいは文法語に変化していく言語変化現象である。

序章では本研究の作成動機や研究背景を説明。今までの研究が言語事実の記述に集中し、文法現象に対する解釈の試みにおいて不足していたことを指摘する。

第１章から第４章までが本論である。まず第１章では中国語の文法化と深く関わる「動詞連続」が扱われる。まず第１節では、多くの言語において文法化され様々な文法的機能をもつようになる授与動詞（中国語では多く“給”）が扱われる。“V＋給”という動詞連続の一例として“拿給”が選ばれ、授与複合動詞としての用法以外に、許容・放任を表す使役マーカーと受動マーカーとしての文法的機能を持つことについて、「授与→使役→受動」という過程を経由した可能性を提示、その具体的プロセスをたどっている。第２節では、成都方言で「目的標識」「補語標識」「方式標識」という三つの文法機能を持つ“來”について検討し、議論がやや単純すぎる嫌いがあるとはいえ、「Event1 という行為（状態）を完成させ、Event2 という行為（状態）に到達する」というスキーマを抽出した。第３節では助動詞“得”が扱われる。多くの言語で助動詞的成分が「根源的」（現実における義務、許可、能力など）意味と「認識的」（推論における必然性、可能性）意味と二つの意味を持つが、熊氏は、成都方言における“得”が「根源的」意味を持つ“V 得/ V 不得”と「認識的」意味を持つ“得 V/不得 V”において相補分布をなすところから、同じイメージスキーマを使った統合的理解の可能性を提示した。

第２章のテーマは主に話し手の気持ちを表す語気助詞である。第１節では語気助詞“口搭”（～すれば、～したので）が“時”に由来する可能性を提示、時間表現から条件表現への推移のプロセスをたどる。歴史文法とも関連するので特に興味深いが、“時”に関する論議がやや物足りない。第２節では“他來了嗦?”（彼が来たのか?/彼が来たって?）のような文における“嗦”が扱われる。他の方言との対照のもと、“嗦”が動詞の“説”から文法化されたものとの熊氏の主張は説得力をもつ。ただし閩語や粤語の関連する現象についてもっと言及しても良かったと思われる。第３節では“你昨天沒去，該是哈”（あなたは昨日行かなかったよね）のような、文末で「押し付け」「気付かせ」の機能を果たす“該是哈”が、音韻変化を経て、“嘎”へと縮約される過程をたどる。この縮約現象自体についての論究は今までもあったが、熊氏の功績は、内容語から機能語への転化に限らない文法化の実例としてとらえたところにあろう。

第３章のテーマは副詞である。第１節では“他來了好久了？”（来てからだいぶたった？/来てからどれくらいになる？）のような文に見られる指示・程度と疑問の重なりが扱われる。熊氏はここで、「程度副詞＋形容詞」のフレーズ“好久”、“好多”が疑問詞へと転化す

る語彙化の過程は「また“是非疑問文”が“特指疑問文”に転化する過程であり、文法化の過程でもある」と主張する。第２節では程度の甚だしさ（「とても」）を表す“之”が、主述の独立を取り消す働きを持つ文語 “之”に由来すると主張する。[NP+之+VP] NP ⇒ NP+[之+VP]への再分析を考える。文語の助詞から口語の副詞への文法化の実例として興味深い。

第４章ではアスペクト関連の事柄が論じられる。第１節では、仮位可能補語・完成相標識・持続相標識などの機能をもつ“倒”が動詞“到”に由来するという説について成都方言を通して論証。“到”から“倒”への声調の変化と文法化の進む度合いが相応しているという指摘が特に興味深い。ただし、それと異なる学説も存在するので、本来は比較検討してほしかったところではある。第２節では存在動詞が進行･状態を表す文法標識になるという言語の一般的傾向を踏まえたうえで、成都方言で「進行･状態」を表す文末の“在”について考察。「図」と「地」という認知言語学の概念を引用して、存在動詞“在”がアスペクト標識として再分析されていくメカニズムを考えた。第３節では“桌子上放得有一封信”のような文における“V 得有（NP)”という文法形式について考察。この“得有（NP)”をアスペクト標識と見なし、[V 得[有＋0]]⇒[[V 得有]＋0]のような再分析の過程を考える。第４節では機能拡張・類推作用という視点から、元は動詞否定の機能を持っていなかった“沒得”がその機能を持つに至るプロセスを考える。

終章では、本論部分をまとめ、虚化、再分析、類推、言語接触、音韻変化などの問題を再検討し、今後の課題を提起。附録として西洋宣教師資料による百年前の四川方言と、自らが作成した自らが作成した現代の四川方言の口語資料をつけた。

以上のとおり、本論文は成都方言の単なる言語事実の記述にとどまらず更に一歩進んで文法現象に対する解釈を試みたものである。文法化あるいは文法マーカーの形成は決して無方向で恣意的な過程ではないという、言語一般に見られる状況をふまえ、その裏に働く認知的動機付けを追求しようとした点、そして日中英に渉る参考文献を相当程度に消化したうえで、自らの内省と調査に基づく確実な語料を駆使した点など評価できることは多い。歴史資料および先行研究の把握にやや不足の面が見られること、提示した仮説を裏付けるデータと考察に不十分な面があること、使用した電子コーパスに関する情報の提示がないことなど、なお問題点も残るが、中国語の地域言語の文法化の例を通して一般言語学への貢献を目指したものとして方言文法研究の一つの方向を示した意欲作であることは間違いないところである。よって本論文は博士（文学）早稲田大学の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

２００７年1月１３日

主任審査委員	早稲田大学教授	古屋　昭弘
	早稲田大学教授	内藤　正子
	東京大学教授　　博士（文学）筑波大学	C・ラマール